

死床に侍つて

岩 鶴 慶 子

久さん

あのやさしいそしていつもにこ／＼して居られたあなたが、たゞ三日の御いたつきの爲にあの冷たい／＼墓石の下に永い眠りについてゐられるとは、私はいくら思ひ替へても、夢でも見てゐるんぢやないかといふ氣がいたします。ほんとのやさしさから幼稚園のこどもを、おいつくしみくださつて、三日前まで皆と一緒に遊んだあなたがと思ふとつく／＼人生のはかなさを思はせられます、六月六日御出園くださったのが、いよ／＼園へのお別れになつてしまひました。

久さん。

九日の早朝でした。あなたからの御使で、私は

取るものも取りあへず、お宅へまゐりました。私
は、この時、どんなに驚いたでせう。お病ひとは
存じながらも、こんなにまで進んでゐなさるとは
思つて居ませんでした。あなたの呼吸のはげしい
こと、私はあなたの御手にとびつくなりに、せき
来る涙に何もかも見へなくなつてしまひました。

ほんとに神様や佛様に近い御心の持主のあなた
は、御自身のお苦しい息の下から、私の家族の事
ばかり御氣づかひくださつて、「園長さんはもう
よくなつたの……ふみちやんは……光ちやんは……」
と一人／＼をおたづねくださいました。私
はあまりの御心切、あまりの御やさしさに、居た
まらずつひ涙してしまひました。あなたは私の涙
を見られて「奥さん泣かなくてくれ、私はまだ死
ぬりやせんので、すぐよくなるから」とこんなお
言葉をお聞かされる度に、私のこの胸ははりさける
様でありました。

あなたが私の家の病人を御心配下さる御心切と園に對する御心遣り、どこまで責任觀念の強いあなたでしたろう。私はあとに心を引かれながらも園の始りの時刻になりましたので、午後の御見舞を約して一應歸りました。園に出まして子どもと遊んで居ますものゝ、何でもだやかな心で居られませう。唯あなたの事ばかり氣になりました、ずい分長い半日でありました。

やがて園も終りましたので、直ぐにもと思つてゐましたが、何だか頭が重くて惡寒がいたしますから、少しの間氣分をしづめてお伺ひしやうと、床に入りました。けれどもなかなか惡寒は止みません。兎角する内にも宅からお使でござりました。私はこの時どんなにか、はね起きたでせう。「もう目がよく見えない様になりました。病人が今一度あなたに會ひたい」と使の人から聞いた時、あんなにまで病の事を御氣にかけてくださるのに、

少し位の病をなせにしておしても早く行かなかつたか、と心から耻ぢ入りました。疊に足もつかず。胸は高い波をうつて、全身水をあびせられた様に感じました。お遣はし下さつた俵にかけ乗りましたが、車がこの時に限りて遅い様で、ま少し走つてくれたらばと、氣のみあせりました。やがて俵が御宅に近づきますと、白衣の看護婦さんが、出たり入つたりして居ました。「待つてゐますから早く」と申されますので、俵からとび下りるなりにあなたの御側までかけつけました。

その時……あなたのお目は……あの御やさしい御目はいかにも物倦さうに上の方を見上げて、開いたり閉ぢたりして居られました。そして私に「奥さん……いろ／＼御……世話になり……ました」私は恥も外聞も忘れて、大聲に泣けてしまひました。日頃お氣の弱かつたあなたが死を前にひかへて、少しの悶えもなく涙一滴も落さなかつた

強さを、私は今更ながらきつと信仰の力だと思ひました。さぞかし私の女々しい姿をあはれに思はれたてせう。あの時の御言葉が……よもやあれが、あなたからの最後の御言葉になろうと思つて居ませんでした。

それから、あなたは久多羅木さんをお待ちしてゐられました。わずか拾分位の間に、三度も目を見開いては「まだか〜」と御たづねになりました。やがて輝さんもお見えになりました。その時、あなたは「いつか……一度は……お別れの……日が来ます」その時は室に居た御近處の方々にまで皆うちあげて泣きました。

久さん

あなたがこの世で明瞭な意識での御言葉はこれが最後でありました。何様急性気管枝肺炎の診断を下されたあなたですものしばらくして、あなたは「皆んなで……お別れの……歌を……」

と申されて、はげしい呼吸の中から「皆さん……明日また……あそびませう……」

このときぎれ〜の歌を聞かせられる度に、私は胸に五寸釘を打たれる様でした。お妹さんの笑やんが、あなたの歌に堪えきれず、私に「先生……」と泣きつきました時は、身も世もない思ひに心は眞暗になりました。それからしばらくあなたは苦しい息のみついてゐられました。今度は「つなぎましたか……」これはあなたが幼稚園で子どもと一緒に遊戯の御つもりでしたのでせう。「面白い……お唱歌を歌ひませう」とやゝ間を置いて「あーめが……ふります……雨が……ふる……」呼吸困難のため、やうやくはき出す一息一息が、雨のちうたになつて出て来ます。ときれとぎれながらも、はつきりと三番の歌の「ケン〜小雉が今鳴いた……小雉も寒かる淋しかる……」と歌はれましたが、その後は呼吸されるやら歌は

れるやら、わからない様になつてしまいました。

あのやさしく結ばれた紅の唇から、あのすみきつたあなたのお聲を聞かしていたといたのも、この歌が最後でした、その容態が一時間餘もつゞきましたでせうか、あなたは御両親や御兄妹の御心づくしもつひに受入れられず、二十一年、花の蕾も開かずして、御佛の御國に召されてしまひました。お母様の御悲しみと御妹様の御なげきも、御さづきにならないやうに、唯すやくと永い眠りにつかれました。

久さん

天命とは申しながらあまりに御いたましいあなたの死は、私を否あなたの生前知人の皆様を、どんなにか悲しませ、どんなにか御いとしく思はせしたでせう。今も尙私の家では幾度となくあなたの事を語りあはない日はありません。その度毎に私にはあの「ケン／＼小雉が今鳴いた」と、とき

れ／＼の歌が何處からか聞こえて來ます。いえ私の心に刻み込まれたあなたの聲が……。

久さん

あなたのお好きだつた花壇の雛芥子の花も、あなたが歸らぬ國へと旅立たれた今、あはれ淋しく後れ咲きのみをとどめて居るのです。來年の花咲く頃、又來る年も……あなたの墓前へひなげしの手向草がありましたならば、私がありし日を偲んで泣いてゐる事を思ひ出して下さい。こんなくならない事ばかり思つてゐる私を、お浄土からあなたは、きつとあはれんで、下さることゝ思はれます。

